

アーチルニュース ちえなっぷ

発行元：仙台市発達相談支援センター 〒981-3133 住所：仙台市泉区泉中央2丁目24-1

TEL：022-375-0110 FAX：022-375-0142 e-mail：arch1@luck.ocn.ne.jp

http://moc.istu.jp/n_town/hattatsu/index.html

本人・家族と地域・市民とともに

アーチルは今年で開設して4年目を迎えました。昨年度は相談件数が開設年度の1.5倍を超し、本人と家族だけでは解決できない課題を持つ方々の相談も多くなりました。こうした課題や相談はアーチルだけで解決する事は困難であるため、地域・市民とともに活動する「地域ケア係」をつくりました。

家族の抱える困難な課題は、相談を受けても即、解決できないことが少なくありません。しかし、学校や施設、生活支援センターなどの関係機関、地域の人々の理解と協力を得ることができると、解決にむけた取り組みができ、その過程で顔の見える関係になった人とのネットワークが形成されていきます。そして、幾重にも本人と家族を支えるネットワークができたときに本人・家族にとって、その地域は安心できる暮らしの場になることがわかってきました。そこで、今回の「ちえなっぷ」のテーマを『互いに支えあう地域とするために』とし、ライフステージ別の相談から見えてきたこと、地域の人々や広く市民に対して理解と協力を得るための主な事業を紹介いたします。

「地域ケア」の「ケア」ということばには、「世話をする・介護をする」という意味がありますが、本人や家族の側から障害者の「自立」をとらえると、家族を本人の「世話・介護するケア」から解放することを意味します。支援費制度のスタートで大幅にその利用が増大したホームヘルプサービスなどの居宅支援事業は、まさにこの家族の世話・介護の負担を軽減するための事業です。ところで、「ケア」にはもう一つ、「気遣う・思いやる」という意味があります。通常は、この「気遣う・思いやるケア」で家族どうしが支えあっていますが、ある日突然、「世話・介護するケア」が訪れる可能性があります。したがって「地域ケア」を充実させるためには制度化されたサービスだけではなく、学校や施設、地域の人々とのつながり、そのなかでの相互支援関係というソフトの機能も重要な要素となります。子どもや高齢者や障害者等、さまざまなニーズをもつ人々が暮らすところが地域です。相互に支えあい安心して生活できる地域をつくることは、すべての地域の人々の共通の課題であると思います。

アーチルの3年間の相談の中で見えてきたことは、地域の中で本人と家族が「孤立」すると、問題が深刻化してしまうことが多いということです。必要なときに必要な支援が届けられるようなサポート的な関係が地域の中であってほしいと思います。アーチルは、今後も、支援が届きにくい方々と早く出会えるようなしくみを地域の方々と一緒につくっていく役割も担っていきたいと考えています。その一歩となるのが「地域・市民とともに」活動する事業です。

所長 末永 カツ子

本人とその家族が
安心して生活できる地域

互いに支えあう地域とするために

3年間の相談支援の振り返りから

将来を見通した子育てのために ～乳幼児期の相談から～

乳幼児期には、子どもの育ちへの不安に即応できる支援が必要です。この「入り口のケア」をしっかりと行うため、相談と一体的な小集団での療育（初期療育グループ）を実施し、同じ悩みを持つ保護者同士や先輩保護者との出会いの場を作ってきました。この取り組みの中で、相談時には「孤独である」と訴えていた保護者が、将来を見通した子育てと、わが子の人生を考えるきっかけを得、自信をつけ、支援される側から支援する側へと変化していきます。先輩保護者も、わが子を育てたことを誇りに思い、自主活動を開始するなど相互に力をつけました。

また、一貫した支援を受けるために子どもの理解者を増やしたいとの願いから、保護者による実行委員会を立ち上げ、myサポートファイル「アイル」を完成させました。今後、身近な地域で困った時にいつでも支援を受けられるように、力をつけた「保護者同士のネットワーク」づくりに取り組んでいきます。

特別支援教育へ向けて ～学齢時期の相談から～

友人関係や学習が難しい、こだわりやパニックで困っている等、学校や家庭で様々な困難を持つ方の相談が多くなっています。また、進級、進学時の引継ぎがうまくいかない、教員の発達障害への理解が不十分、放課後や長期休暇を家庭以外で過ごせる場が少ない等の課題もあります。この3年間、積極的に学校訪問を行ってきましたが、ようやく、本人と家族のサポートのために学校側とも連携できることが増えてきています。特殊教育は特別支援教育へと転換します。個別の教育支援計画がつけられ、特別支援教育コーディネーターの配置がなされ、学校にも地域の社会資源と連携・協働する窓口ができることとなります。

学齢期の子どもと家族が地域で安心して生活できるために、学校を含めた関係機関が支援の目標を共有し、期待される役割を果たせるよう、研修の実施やネットワークづくりに取り組んでいきたいと思ひます。

自立した地域生活へ向けて ～成人期の相談から～

就労できない自閉症者、2次的な問題による長期在宅、休日に一緒に楽しめる仲間や場が欲しい等々……、様々なニーズを持つ本人と家族との出会いを通して、本人が安心して過ごせる「場」を本人や家族と共に探してきました。短期間で解決が難しく長期的・継続的な関わりが必要となる深刻な相談も少なくなく、相談を重ねることで関係機関とのネットワークが拡大してきています。

今後の課題は、その人らしい地域での「自立」のためにどうサポートしていくのかということです。そのためには高機能自閉症者や重度の知的障害者たちも含めた発達障害者が安心して暮らせる「住まい」の確保と、QOLを高めていくための、本人の特徴に合わせた支援プログラムを取り入れたケアマネジメントによる支援が必要であると考えています。

アーチルでは平成14年4月の開所以来、相談件数が年々増加しており、平成16年度は6,507件と平成14年度の4,182件の1.5倍を超えています。社会情勢の変化や利用者のニーズの多様化に伴い、これまでのアーチルの力量やネットワークだけでは十分に利用者のニーズに応えられない事例が増えてきています。

今回の「ちえなっぷ」ではこれまでの3年間の相談支援や取り組みを振り返るとともに、4年目を迎えたアーチルが取り組むべき具体的な内容と方法について考えていきたいと思ひます。

市民との協働した取り組みから

3,295人の方が参加！

～出会いの場としての療育セミナー～

本人と家族が抱える課題をテーマに市民への啓発に加え、本人や家族、支援者、市民、参加者が「時間」と「場」を共有することで、新たな出会いやつながりができることを期待して企画しています。3年間で11回開催し、3,295人が参加しています。平成17年度は「自閉症児者と家族が安心して暮らせる地域の実現に向けて」をテーマに、3回の療育セミナーを通して「ひとりひとりの暮らしを支えるしくみづくり」について考えていきます。今年度第1回療育セミナーの報告は裏面の「かけはし」をご覧ください。

市民とのかけはしとなることを期待して

～ボランティア講座の開催～

ボランティア講座は、本人や家族と直接出会うことにより、地域での理解者となってもらいたいと考えて開催しています。そのため、本人や家族とのふれあいのために、家庭での実習を大切にしています。現在希望者は、アーチルでの託児、おもちゃづくり、イベントや行事への参加のためのボランティアとして活動しています。今年度の養成講座受講者の声を裏面の「かけはし」で紹介しています。

地域とのつながりをつくるために

～2つのネットワークが誕生～

本人や家族が地域で生き生きと暮らししていくためには、本人と家族、支援者、地域とのつながりが必要です。3年間の相談支援を通して、今年度は新たに2つのネットワークが誕生しつつあります。それらは、保護者自身による保護者支援ネットワークと本人もメンバーとなる余暇活動の充実のためのネットワークです。

報告書をまとめ市に提言！

～自閉症・発達障害支援センター連絡協議会～

既存のサービスでは対応できないニーズや課題について解決を図るため、保護者、医療、教育、労働関係等の委員で構成される連絡協議会を開催しています。平成15年度から2年間で自閉症児者と家族が生涯に渡って安心して地域での生活ができるよう支えていくための提言書がまとめられました。

そこでは、関係機関とのネットワークの更なる強化、既存の支援のしくみでは対応が難しいものについては新たな社会資源を開発していく必要性が述べられています。

現在、この提言を受けて新たな支援団体の立ち上げに向けた取り組みがなされています。

地域・市民
とともに

☆市民との出会いの場を

☆理解者の拡大に向けて

☆当事者・支援者・地域との
つながりを

☆課題解決に向けての活動を

本人・家族
とともに

☆出会いから保護者同士の
ネットワークづくりへ

☆個別の相談・支援から
保護者・学校との連携

☆その人らしい地域での
「自立」に向けて

発達障害児者と家族の地域生活支援を行なっていくには、本人、家族とともに必要なネットワークを地域で拡大しながら、これまでの地域の資源や新たにできる地域の資源と協働していく必要があります。支援を受ける側であった本人や家族も地域に貢献することができます。当事者、支援者、地域の人々が力を合わせていく機会を作っていくことが、「地域で互いが支えあう」「誰もが安心して暮らせる地域社会の実現」に向けた第一歩なのかもしれません。

アーチルでは、毎日のライフステージでの相談と常に連動して、研修やボランティア、ネットワークや連絡協議会などを地域・市民と協働で実施していくことで「互いが支えあう地域の実現」を目指していきたいと考えています。

かけはし

「アーチル」とは「アーチ (arch: 橋)」と「パル (pal: 仲間)」とをかけたもので、センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを込め、市民公募によってつけていただいた愛称です。このコーナー「かけはし」は、読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるよう、皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきたいと思ひます。



第1回療育セミナーを終えて

7月24日、第1回療育セミナーを開催しました。今回は265名の方が参加し、地域で自分らしく暮らすためのしくみはどうあればよいか考えることができました。保護者として谷口さん、三重県あさけ学園の松本知子さん、石狩市はるにれの里の金子浩治さん、伊達市地域生活支援センター小林繁市さんの4人からのメッセージとアンケートからの声を紹介します。

谷口さん
「これなら安心してまかせられる自閉症の特性に対応できるグループホームと支援の仕組みを地域に！」

「自閉症の人のグループホームがないことを知った。今後は、グループホームの重要性や必要性を世間に広めていこうと思う。」

松本さん
「入所中、入所前から、地域移行に向けた支援プログラムを！」

「障害が重くても、一人の人間として地域で暮らせる支援について学べた。成人期を見通した支援の大切さを考えさせられた。」

金子さん
「障害が重くても必要な支援と仕組みがあれば、地域で生活できる！」

「はるにれの里の取り組みは先進的。新しい取り組みを進めていく時に“保護者と一緒に”というスタンスが大切なのだと確認した。」

小林さん
「まちに障害者が慣れるのではなく、まちが障害者に慣れるのです！」

「伊達市ではまち全体で安心して暮らせる地域づくりをしている。仙台も、もっと市民を巻き込んだ取り組みが必要！」

ボランティア講座に参加しています

この講座は、地域みなさんに理解者となってもらい、今年も42名が講義や体験活動、家庭実習に取り組んでいます。実習を終えた参加者からのメッセージを紹介します。

☆水戸早苗さん
「実習や疑似体験で発達障害をもつ人の気持ちが少し分かりました。知識を学ぶことも大切ですが、相手の気持ちをまず理解して関わっていく大切さを実感できました！」



講義の後のミーティング風景

☆藤田真理さん
「自閉症は講義で知っていましたが、直接かかわり聞きにくいことも聞けて、イメージが変わりました。かかわって初めて分るのでですね。みなさんに経験してほしいです！」



体験活動をする参加者たち

ボランティア実習を受け入れた佐藤久美子さんから

「熱心に関わっていました。どうしていいか分からないようでしたが、自分が子供のことを自閉症と分かった時と同じだと思いました。今後の活動を期待します。今回、ボランティアを育てる側になって、いい経験ができました。これからも受け入れていきたいと思ひます。」

編集後記

今年度のちえなっぴは、「地域・市民とともにする活動」を中心にお伝えしていきます。セミナーのお話を聞き、仙台での歩みを進めるために、具体的な活動をしていかねばならない！と痛感したところです。みなさんとともに一歩一歩歩いていきたいと思ひます。次号は11月下旬に発行予定です。(首藤)